

- 1、科目区分 選択科目 A  
授業科目名 日本音楽教材研究②

## 日本伝統音楽の授業づくりについて

音楽教育講座 石塚真子

### I、日本音楽教材研究②

#### 1、授業の目的

本授業は、日本の伝統音楽では何が大切にされているのか基礎的な知識を得ることと、学習材としてとり上げる際の考え方と方法について理解することを目的としている。

#### 2、授業の到達目標

- (1)日本の伝統音楽では何が大切にされているのか説明できる。
- (2)日本の伝統音楽を学習材としてとり上げる際の考え方と方法について説明することができる。
- (3)日本の伝統音楽の授業づくりにおける学習材研究を行うことができる。

#### 3、授業の概要

小・中学校の教科書にとり上げられている学習材の分類・分析・検討を通して、学習指導要領や教科書における日本伝統音楽の教育内容を理解する。さらに、具体的に、雅楽、狂言、歌舞伎、民俗芸能の太鼓の学習材と学習方法について学ぶ。

#### 4、授業の実際

「日本音楽教材研究②」（後学期開講）は、3年生対象の授業である。受講者は学校教育2名、音楽文化コース6名の計8名であった。

##### (1)授業時間の変更

昨年度は、太鼓の実技演習を中心にとり組んだが、防音設備の関係で6時限目に授業を開講した。そのことに関する質問紙調査を行ったところ、不都合が生じた点について、「1~6時限目まで授業が入っていたので、少し大変だった。」「サークル等の練習と重なってしまった。」「専修・コースの演奏会に向けての練習に支障が出た。」等の回

答があった。そのため、今年度は、講義を中心とした授業に変更し、「民俗芸能の太鼓」の学習のみ6時限目（2回）に行った。

##### (2)授業内容

第1回~5回は、小・中学校の教科書にとり上げられている学習材の分類・分析を行い、学習指導要領や教科書における日本の伝統音楽の教育内容に関する学習を行った。

第6回~9回は、「雅楽」の教材化について検討した。実際に、箏、龍笛の実技演習を行い、日本の伝統音楽の学習における唱歌の重要性について講義した。さらに、「越殿楽」の演奏にもとり組み、中学校の音楽科における「雅楽」の授業づくりについて検討した。

第10回~12回は、「歌舞伎」をとり上げ、学習材としての「歌舞伎」のとらえ方について講義した。また、「見得」と「ツケ打ち」、下座音楽の楽器の演奏体験にとり組み、「歌舞伎」を鑑賞するだけではなく、表現活動をとり入れた授業づくりについて提案した。その学習を踏まえて、中学校の音楽科における「歌舞伎」の授業づくりについて検討した。

第13回~15回は、学習材としての「民俗芸能の太鼓」についての講義、およびゲストティーチャーを招き、太鼓の演奏と身体に関する指導を行った。さらに、実技演習を通して、授業づくりの方法について学習し、中学校の音楽科における「民俗芸能の太鼓」の授業づくりについて検討した。

授業づくりについては、3グループに分かれてとり組んだ。「雅楽」では、唱歌をとり入れた実践、「歌舞伎」では、表現活動をとり入れた鑑賞の実践、「民俗芸能の太鼓」では、口頭伝承での実践を行った。学生なりに、各回で学んだことを基に、日本の伝統音楽を、より身近に感じることができるよう授業づくりについて検討した。

## 5、学生の授業評価

### (1)授業を通して学んだことについて

この授業を通して学んだことについて、記述式の質問紙調査を行ったところ、つぎのような回答が得られた。

- ・「日本の伝統音楽に関する授業づくりの際には、児童・生徒自身が体験したり、表現したりする活動を取り入れていくことが重要である。」
- ・「以前の私と同様に、日本の伝統音楽を異文化のように感じている生徒たちにそれらを伝えるためには、まず『身近に感じてもらう』ということから始めなければならず、本当に焦点を絞ってそれを深く学んでいくことで興味を持たせることが重要である。」
- ・「伝統音楽の授業を行う際には、生徒と教材の共通点を探し、興味を引く内容から入ることが大切である。」
- ・「教師自身が伝統音楽に触れ、その良さ、その指導法を知っておく必要がある。」

講義や実技演習だけではなく、実際に授業づくりを行うことで気づいたこと、学んだことがあったようである。西洋音楽を中心に学んできた学生が、2、3回の講義を基に、実際に授業実践を行うことは難しかったと思うが、自分自身が、伝統音楽に距離を感じている分、生徒の立場から授業づくりについて考えることができたようである。

また、これまで、「雅楽」や「歌舞伎」は鑑賞教材としてとり組まれることが多かったが、この授業で、表現活動を取り入れた授業づくりについて学習したことで、「雅楽」、「歌舞伎」の授業づくりにおいても、表現活動を取り入れた実践に挑戦してくれた。

### (2)表現活動を取り入れた実践を行う場合の課題について

- ・表現活動を取り入れる場合、教師自身ができることが大きなポイントだと思いました。「歌舞伎」の見得や、「雅楽」の龍笛をもっと深く学びたい。
- ・実際に伝統音楽を観に行ったり、プロの方に習い基礎から学びたい。

伝統音楽を身近に感じてもらうには、授業の中で生徒自身が体験したり、表現したりする活動を取り入れる必要性を感じるが、実際に指導を行う場合、指導者自身が演奏できなければならないので、実技を基礎から学びたいという感想が多かった。

今年度は、授業内容を太鼓の実技演習から講義に変更したため、「雅楽」「歌舞伎」「民俗芸能の太鼓」の3つのジャンルについてとり組んだ。そのため、基礎的な演奏技術を習得して授業づくりを行うのではなく、講義を通して基礎知識を学び、演奏技術等が習得できないまま授業づくりを行ったことが、このような感想に繋がったと考える。

## 6、今後の課題

本授業では、日本の伝統音楽のとらえ方、学習材の研究手法、授業づくりにおける考え方について講義を行った。また、講義を通して学んだことを基に、日本の伝統音楽の授業づくりにとり組んだ。

学生は、「雅楽」「歌舞伎」「民俗芸能の太鼓」に興味・関心を持つことができ、日本の伝統音楽の授業づくりにおける考え方は理解できたと思うが、実践力を育成することはできなかった。実践力の育成までは到達目標として考えていなかったが、学生が興味を持った楽器やジャンルについて、さらに自己学習を行うことができるような情報を提供し支援を行えたら、この授業が出发点となって、授業後も学習を深めることができたのではないかと考える。授業が終わりではなく、継続的な学びの始まりとなるような授業を検討したい。

また、講義のみ、あるいは実技演習のみという授業内容ではなく、1つのジャンルについて基礎知識、実技演習、授業づくりを含めたとり組みは、学生の日本の伝統音楽の理解に効果的であったといえる。

今後は、1つのジャンルに絞り、基礎知識、実技演習、授業づくりを通して実践力を育成できるような授業を行いたい。